

## 新春講演会 報告

開催日：平成28年1月23日(土)

13:30~15:50

場所：奈良市インフォメーションセンター

講師：吉村 文彦 京都大学農学博士

- ・京都大学大学院農学研究科博士課程修了
- ・微生物生態学者
- ・元岩手県「岩泉まつたけ研究所」所長
- ・京都・岩倉「まつたけ山復活させ隊」代表

演題：「里山は重要な生態系」

— “万葉の里” にまつたけの夢を見る —

聴講者：56名(会員48名 外部8名)



吉村文彦先生

・講演に先立ち午前中、「まつたけ山復活させ隊」の会員6名の方を同行され「ならやまF」を視察されました。

### 【吉村先生の「ならやまF」視察のご感想】

『環境が素晴らしく、良く整備されている。アカマツ林が少ないのに驚いた。中央皆伐区は数年で多様な実生植生の発生が見込まれる。以前はアカマツ林であったと思われるので、マツ林に戻すのも選択肢の一つではないか。第5地区北斜面のマツは、うまく手入れすれば良いアカマツ林になる。枯損木の伐倒、障害灌木を繁茂させないようにすることが肝要と思う。』

### 【講演要旨】

1. 奈良は、日本で最初にまつたけが採れた地皆さんの「里山復活活動」の中でぜひ「まつたけ復活」にも取り組んでほしい。私たちも応援したい。今や「まつたけ」は絶滅危惧種に近い。
2. 里山の放棄によって生物多様性が低下

・「里山」は、農業(材、薪炭、芝刈、落葉、刈敷などの採取)たたら式製鉄業、窯業、酒造り業など人の生産活動の場であった。1960年代に入り、エネルギー源の変化—薪炭・石油から、プロパン・石油へ転換—、化学肥料の全面使用—刈敷・柴・落葉など不採取—などの生活の近代化により、里山は放棄され荒廃した。

・人為が加わらない里山は、その植物相が急速に変わった。見た目には緑が豊かであるが、樹種間の生き残り競争に勝った植物中心の林になり、アカマツもこの環境変化の中で急減した。

そこに住む多くの動物も変化をきたしている。

・里山という生態系に適応して共に生きてきた生物の多様性が低下した。

### 3 まつたけ発生量の減少

- ・戦中、戦後復興期、1960年代の大量伐採、1970年代の松枯れ病
- ・土壌の富栄養化等里山放棄による生息適地減少
- ・国産まつたけの生産量推移—最盛期 1941年約12000トン、40年代約5800トン、60年代約1700トン、70年代約700トン、2014年約40トン

### 4 まつたけは時代を通して日本人に好まれる

・季節の移ろいを大切にする日本文化が、日本人にまつたけの香りを五感で楽しむ喜びを与えた。奈良、平安、鎌倉、江戸時代を通して貴族や高級僧侶たちなどに好まれた。

### 5. アカマツとマツタケは共生関係

- ・マツタケはアカマツの根に感染して共生関係で生育する「菌根性」のきのこ(菌類)である。お互いに栄養源を与えあっている。
- ・マツタケ子実体の傘の裏から飛び出した400億個の胞子が菌糸を作りアカマツの細根に感染して菌根ができる。感染して共生が始まってもマツタケが採れるとは限らず、アカマツとマツタケの関係は非常に微妙で、不明な点が多い。

### 6. マツタケの林地栽培

- ・マツタケができる最低の必要条件は①若いアカマツ林があること②適正な土壌条件③近辺にマツタケの発生があることだが、重要なポイントは土壌。
- ・土壌の富栄養化を防ぐため「地掻」は最も必要な整備作業となる。

(寺田 孝)